

式 辞

桜花まさに綻ばんとする今日の佳き日、福岡県教育委員会をはじめ、ご来賓・保護者等の皆様のご隣席を賜り、本校第六十四回卒業証書授与式を挙行できますことは、卒業生はもとより、在校生・教職員一同、誠に光栄であり、厚くお礼申し上げます。

ただいま、卒業証書を授与しました、第六十四期生、百五十二名の諸君、卒業おめでとうございます。

本校に入学の頃は、まだ、あどけなさが残っていた諸君も、今は堂々とした若者に成長しました。今日の日を迎えるまで、どの御家庭におかれましても、多かれ少なかれ、御苦勞があったのではないかと思います。保護者等の皆さまにおかれましては、感慨もひとしおのことと拝察いたします。

本日のこの喜びは、卒業生諸君の努力の賜であることは、言うまでもありませんが、諸君のことをいつも気遣いながら、力強く支えてくださった保護者等の皆さま、そして周囲の方々の暖かい励ましのお陰であることを忘れてはいけません。高校を卒業していくという、こういう節目のときには、メリハリのある、しっかりとした態度が必要です。諸君が、確かな成長を遂げた証として、是非、ご家族をはじめ、お世話になった方々に、きちんと卒業の報告をするとともに、感謝の気持ちを素直に伝えてください。

振り返ってみますと、諸君が入学した令和三年四月は、新型コロナウイルス感染症対策の一環として、新しい生活様式を踏まえた学習活動が展開されており、三密の回避など、制限の多い高校生活のスタートになりました。今では少しずつ日常が戻ってきておりますが、学校行事等の縮小開催などは、準備期間も短く、諸君の力を十分に発揮するには、物足りなかったことでしょう。

このような制限のある高校三年間を過ごしてきた諸君ですが、本日立派に卒業していきます。卒業の饒として、私は次の二つの言葉を諸君に贈ります。

一つ目は、「絆」と言う言葉です。諸君は、この「絆」という言葉に何を感じるのでしょうか。科学の進歩により、人類は色々な物を見ることができるようになりました。はるか宇宙の果てまで、また小さくは遺伝子まで、見るできるようになりました。今後ますます、マクロ、そしてミクロの世界が解明されていくことでしょう。でも将来、我々はすべてのものを見ることができるようでしょうか。フランスの有名な作家、サン・テグジュペリの「星の王子様」の中に、「本当に大切なものは目には見えない。」とあります。親子の愛、兄弟愛、友情、

恋愛、そして感謝、そのような気持ちは目には見えません。しかし、人が生きていくうえで最も大切なものではないかと私は思います。そしてそのようなものこそ「絆」と呼んでいいのではないのでしょうか。どうかこれからの人生、人と人との「絆」を大切に生きていってください。

二つ目は、「心豊かに生きる」です。以前、私はある住職の話を書く機会がありました。その住職は「心豊かに生きるためには、自分と他人とを比べてはだめだ。人と比べると、すぐに役職や肩書に目が行くようになる。そして人の幸せを妬むようになる。本当に比べなくてはならないのは、他人とではなく、昨日までの自分だ。」と話されました。その通りだと思います。人と比べ、勝った負けたで満足するのではなく、今までできなかったことが今日は少しだけだができるようになった、そんな自分の成長に満足をする。そういう心の姿勢を持って過ごしてほしいと思います。どうぞ心豊かに生きていってください。そして諸君の周りの人を幸せにしてください。

以上、「絆」そして「心豊かに生きる」の二つの言葉を餞として諸君へ贈ります。私は、人との出会い、めぐり逢いが好きで、教師になりました。初任の頃は、「次はどんな生徒に出会うのだろう」と、出会いを外に求めていました。でも今は違います。今は、私自身が、生徒たちや先生方にとって、いい出会いになるように努めています。諸君には、これから、多くの出会いがあります。それぞれの出会いの中で、諸君との出会いが、相手様にとって、素晴らしい出会いであったと言われるように過ごしてほしいと思います。

最後になりますが、高いところからではございますが、保護者等の皆さまに、一言お礼申し上げます。入学以来、本校教育活動に対しまして、御理解と御協力を賜り、誠にありがとうございました。お子様は、本日をもって、卒業していきますが、今後とも末永く、本校にご縁をいただきますようお願い申し上げます。

それでは、第六十四期生の諸君、これからの人生、絆を大切に、そして、心豊かに生きていってください。諸君には、素晴らしい出会いが待っています。諸君の洋々たる前途が、健やかで、幸多きことを心から祈念して、式辞といたします。

令和六年三月一日

福岡県立若松商業高等学校 校長 長野 満晴